

ボージャ著作における特殊な美点(vaiśeṣikaguṇa)と模倣表現(anukaraṇa)

本田義央

1. はじめに

ボージャ(Bhoja, 11世紀)は修辞学書『シュリンガーラプラカーシャ』(*Śṛṅgāraprakāśa*)および『サラスヴァティーカンターバラナアランカーラ』(*Sarasvatīkaṇṭhābharaṇālankāra*)においてラサに重点をおいた独特の修辞理論を構築した。ボージャのラサ理論は、簡潔に言えば、複数の個別的なラサの上位にそれらを包括するものとしての唯一最高のシュリンガーラ(愛)をたてる点に特徴がある。その上位のラサであるシュリンガーラは、ひとつの作品中の種々の要素の交錯を通して、あたかも複数の火があつまって一体となり一つの炎として大きく燃え上がるように成立するものである、とボージャはいう¹。ボージャによれば、文学作品(kāvya)は、欠点を捨て(doṣahāna), 美点をとり入れ(guṇopādāna), 修辞と結びつき(alāṅkārayoga), ラサを必ずそなえていなければならない(rasāvīyoga)。そしてそれら四つの要素を前提として上位のラサとしてのシュリンガーラは成立する。

欠点, 美点, 修辞, ラサというこれら四つは、ボージャに先行する修辞学者たちによってすでにそれぞれに論じられていたテーマである。ボージャに先行する修辞学者たちは、作品にとっての欠点(doṣa)と美点(guṇa)について論じる際に、ある場合には欠点とされるものが別の場合には美点となる場合があることに気付いていた。たとえば、耳障りな音による表現は、恋情を描く作品においては欠点となるが、英雄の勇猛さを描く作品においては逆に美点

となる。ボージャはそのような欠点ではあるがある場合に美点となるものに「欠点であるが美点となるもの」(doṣaguṇa)あるいは「特殊な美点」(vaiśeṣikaguṇa)という特別の名称を与えた。欠点が美点となる基準は、Raghavan(1942, 214-281; 1978, 182, 209)が明らかにしているように、それらの要素の作品に対する「適合性」(aucitya)に求められる²。

しかしながら、「適合性」という基準のみによって欠点を美点とするには問題がある場合がある。それは模倣表現(anukaraṇa)がかかわる場合である。文学作品の登場人物は、かならずしも常に文法的に正しい語をはなすわけではない。いいかえれば、作品中に模倣される登場人物の言葉はその人物の身分や心情をあらわすものであり、詩人は時にそもそも誤った言葉を登場人物に語らせる場合があるのである。仮に「適合性」という基準を満たすにしても、誤った言葉を作品の「美点」とすることが妥当なのだろうか。美点たるためには、その言葉は正しいものでなければならないのではないか。

本稿の目的は、ボージャが、パタンジャリ(Patañjali)の『マハーバーシュヤ』(*Mahābhāṣya*)にみられる模倣の正語化についての議論をふまえ、それをボージャ自身の修辞学へ適用することにより、模倣表現を美点とする場合に予想される上記の問題を回避していることを明らかにすることである。

²Raghavan がいうように、この「適合性」は、その語自体は使用されないにしても、古くはバラタ(Bharata)の『ナーティヤシャーストラ』(*Nāṭyaśāstra*)にまでさかのぼることができる

¹ボージャのラサ理論については、Raghavan(1978), Pollock(1990), 本田(2005)を参照せよ。

2. 特殊な美点

ボージャは、「欠点ではあるが美点となるもの」「特殊な美点」という語を『シュリンガーラプラカーシャ』『サラスヴァティーカンターバラナ』において使用するが、その意味するところに違いはない。『シュリンガーラプラカーシャ』での説明を見てみよう。まず、ボージャは、女性を喩えとして用いて、次のようにのべている³。

そして、若い女性の身体に、彼女を求める男達が深い関心を抱く原因である外的(bāhya)・内的(āntara)・特殊(vaiśeṣika)な三つの美点がある。それらのうち、外的[な美点]は、家系・年齢・容姿・愛らしさなどである。また内的[な美点]は、良い気質・利口さ・清純さ・幸せであることなどである。一方、欠点であっても、特定の抛り所や特定の状態という条件によって美点となるものが特殊な[美点]である。たとえば次のようにいわれている。「蓮っ葉であること(avinaya)こそが遊女たちの魅力になっている。燃える香木の煙は珍重される。」と。

ここでボージャは、女性について、その美点を三つあげている。一つは、外的な美点であり、それは生まれのよさや容姿端麗であることなどである。もう一つは内的な美点であり、それは気質の良さなどの内面的な長所である。そして、加えて、特定の抛り所や特定の状況にある場合に美点とみなされる「特殊な美点」があげられる。たとえば、通常、女性のつつしみぶかさは美点であり、蓮っ葉さは欠点である。しかし、遊女という特定の抛り所、あるいは特定の状況にあるときには、蓮っ葉な奔放さは、その女性の魅力、すなわち美点となるのである。

そしてボージャは、この喩えにしたがって、

³ŚP 9 (528.14-17): ayam eva guṇālaṅkārayor viśeṣo yadguṇopādāne niyamo 'laṅkārayoge tu kāmacāra iti / guṇās ca yuvatyaḥ śarīreṣu trividhās tadarthinām ādarātiśayahetavo bhavanti bāhyā āntarā vaiśeṣikās ca / tatrānavāyavayorūpalāvanyādayo bāhyāḥ, śīlavaidaghyamāhābhāgya-saubhāgyādayaś cāntarāḥ; ye tu doṣā apy āśrayaviśeṣāvasthāviśeṣādyupādher guṇatvam āśrayante te vaiśeṣikāḥ / sāmāṇyasundarīṇaṃ vibhamamāvahai aviṇao ccea / dhūmo ccia pajjaliāhi bahumao surahidārīṇā // [sāmānyasundarīṇaṃ vibhamam āvahaty avinaya eva / dhūmocayaḥ prajvalitānāṃ bahumataḥ surabhidārūṇāṃ //] chāyā は Raghavan (1978, 294) による。

文学作品について次のように述べる⁴。

文学作品の身体(kāvyaśarīra)においても、それら同じ三つがある。それらのうち、外的[な美点]は、言葉の美点(śabdaguṇa)である。なぜなら、それら[言葉の美点]は、家系などと同じように、外的なものとしてあらわれるからである。内的[な美点]は、意味の美点(arthaguṇa)である。それらは[女性の]気質の良さなどと同じように、よく考えることによって知られる。特殊[な美点]とは、欠点ではあるが美点となるもの(doṣaguṇa)である。なぜなら、それらは、特定の人物などの条件にもとづいて欠陥ではあっても美点として知られるからである。

女性の場合の家系などと同じように外的なものとしての言葉についての美点、女性の気質のよさなどにあたる内的な美点は意味の美点である。そして作品中の特定の人物などにのみあてはまる特殊な美点都在这里あげられている。

欠点が美点となる条件のひとつは模倣表現の場合である。ボージャは次のように述べている⁵。

それらの語に関する欠点のうち、一部欠落や不明瞭など[という欠点を含む]正しくない語は、模倣表現の場合には美点である。たとえば[次のような詩節がある]。

「愛人は、髪をつかんであごをあげさせあららしくキスをし、誇り高い女の「フン、フ(huṃ hu), 放して放して/放して私の... (muñca mamama)」というよわよわしい声を抑える。」

この詩節では、本来「フン、フン」(huṃ huṃ)と表現しなければならないところで、最後のアヌスヴァーラが欠けたかたちで表現されている。これは間違った語であり、本来ならば作品にとって一部欠落(mliṣṭa)という欠点となつて

⁴ŚP 9 (529.1-3): kāvyaśarīre 'pi te tridhaiva / tatra bāhyāś śabdaguṇāḥ, te hy anvavāyādivad bāhyatvenāvabhāsante / āntarā arthaguṇāḥ, te sauśīlyādivad vimarśena jñāyante / vaiśeṣikā doṣaguṇāḥ, te hi pātraviśeṣādyupādheḥ doṣā api guṇatvena vikhyāyanta iti /

⁵ŚP 9 (539.2-3): tatra padadoṣeṣu asādhor mliṣṭamlecchitāder anukaraṇe guṇatvam / yathā unnamayya sakacagrahamāsyam cumbati priyatame haṭhavrītyā / huṃhu muñca mamameti ca mandam jalpitam jayati mānavatīnām //

しまう⁶。しかし、この詩節では、キスされたせいで声が途切れたさまを模倣した表現であるから、それは作品にとっての欠点ではなく美点となる。また、それに続く箇所は、途中で途切れてしまっているために「放して、私の、放して」(muñca mama muñca)なのか「放して、私の、私の」(muñca mama mama)なのかわからない。これは、作品にとっては、本来であれば不明瞭 (mlecchita) という欠点となる⁷。しかし、この場合も、女性の言葉が途切れたことを効果的に描く表現であるから、それは作品の欠点とはならず、美点となるのである。

3. 名詞語基とされる模倣表現

ボージャは、『シュリンガーラプラカーシャ』において、名詞語基 (prātipadika) の一つとして模倣表現をあげている⁸。

それら [六種の言葉] のうち、名詞 (nāman), 不変化詞 (avyaya), 模倣 (anukaraṇa), 第一次名詞派生接辞 (krt) でおわる項目、第二次名詞派生接辞 (taddhita) でおわる項目、複合語 (samāsa) が名詞語基 (prātipadika) である。[パーニニ及びパタンジャリによって次のように] いわれている。「動詞語根、接辞、接辞でおわるもの以外の有意味 (arthavat) な項目は名詞語基 [という名称で呼ばれる]」(A 1.2.45) 「第一次接辞でおわる項目、第二次接辞でおわる項目および複合語もまた [名詞語基という名称で呼ばれる]」(A 1.2.46) 「意味をもたない不変化詞 (nipāta) にも名詞語基という名称がいわれるべきである」

⁶Ratneśvara on SKĀA 1.123: *luptaikadeśam mliṣṭam / ... / huṃ hu iti dviṭiyahuṃkāre binduproñchānān mliṣṭam /*

⁷Ratneśvara on SKĀA 1.123: *avyaktarūpaṃ mlecchitam / ... / mama meti kiṃ muñca muñceti mliṣṭam uta mameti na niścīyate /*

⁸ŚP 1 (15.11): *uktā ṣoḍhaivam eṣāpi prakṛtiḥ pratyayātmikā / athātaḥ prātipadikarūpā ṣoḍhaiva kathyate // tatra nāmāvyayānukaraṇakṛttaddhitasamāsāḥ prātipadikāni; yad āha arthavad adhātur apratyayaḥ prātipadikam (A 1.2.45), kṛttaddhitasamāsāś ca (A 1.2.46), nipātasya cānarthakasya prātipadikasamjñā vaktavyā (MBh ad A 1.2.45) iti; tatrārthavadgrahaṇena nāmāvyayānukaraṇāni grhyante, kṛttaddhitasamāsāś tu kaṇṭhoktyā iti / nanv ete 'py arthavanta eva / satyam etat; kiṃ tu kṛtas taddhitāś ca pratyayaḥ; teṣāṃ apratyayagrahaṇāt prātipadikasamjñā na prāpnotīti kṛttaddhitagrahaṇena tad upasamgrhṇāti / samāsagrahaṇena tv arthavatsamudāyasya samāsasyaiva prātipadikasamjñeti jñāpayan tathāvidhasya vākyasyaitaṃ nivartayati //*

(MBh ad A 1.2.45) と。そこでの「有意味な」という言及によって名詞・不変化詞・模倣が理解される。一方、第一次接辞でおわる項目・第二次接辞でおわる項目・複合語は [A 1.2.46 における] 直接の言及によって [理解される]。

ここで、ボージャは、模倣表現について、それが名詞語基であることを明示し、また「有意味」(arthavat) なものであるとしている。模倣表現の場合、それが「有意味」であるというのは、すこし特殊な意味をもっている。すなわち、後に見るように、模倣表現の「意味」すなわち表示対象は、模倣されるもともとの言葉、被模倣表現である。

このように、名詞語基のなかに模倣を含めることを、ボージャは彼の文法書『サラスヴァティーカンターバラナヴァーカラナ』(Sarasvatīkaṇṭhābharāṇavyākaraṇa) において、名詞語基を定義する一連のストラのなかで「複合語、模倣、不変化詞もまた [名詞語基という名称で呼ばれる]」(SKĀV 1.7: *samāsānukaraṇanipātāś ca //*) というように、模倣を明示することによって、一層明白に示している⁹。

4. 模倣表現

ボージャはつづいて、『シュリンガーラプラカーシャ』において、名詞語基に分類した個々の項目について説明していくが、そのなかで、模倣表現は、「言葉をそのままの形で述べること」と説明される¹⁰。それについてボージャは次のような例をあげている¹¹。

⁹注釈によれば、被模倣表現と模倣表現の不異なるものとして表現しようとする場合に、模倣表現は名詞語基と呼ばれるが、被模倣表現は有意味ではあっても名詞語基とは呼ばれない。HH: *samāso 'nukaraṇam nipātāś ca prātipadikasamjñāni bhavanti / samāsaḥ, rājapuruṣaḥ / anukaraṇam, pacatim āha / nipātaḥ, pralambate / prātipadikatvāt svādyaupattau tiñnātiṇa iti sarvānudāttatvaṃ bhavati / arthavattvāt prātipadikatve siddhe samāsagrahaṇena niyamārthenārthavatsamudāyasya vākyasya na bhavati / anukaraṇagrahaṇena cābhedavivakṣāyāṃ gav ity ayam āhetyādāv arthavato 'py anukāryasya na bhavati / nipātasya tv anarthakasyāprāptā vidhīyate //*

¹⁰ŚP 1 (44, 11): *śabdasya tādrūpyeṇābhidhānam anukaraṇam /*

¹¹ŚP 1 (45, 10-13): *pi pi priya sa sa svayaṃ mu mu mukhāsavaṃ dehi me ta ta tyaja du du drutaṃ bha bha bha bhājanam kāñcanam / iti skhalitajalpitam madavaśāt kuraṅgīdṛśaḥ prage hasitahetave saharātibhir adhyaiyata //*

「い、い、いとしい男よ。じ、じ、自分で、私に、く、く、一口のお酒をちょうだい。す、す、すぐに、金の、う、う、器を、す、す、すてて」という、鹿のような眼をした女の酔いのせいでろれつのまわらないことばを、一緒にいる女たちは、夜明けに、笑いのたねに、思い出した。

この例では、たとえば「いとしい男よ(priya)」というべきときに、酔いのせいでろれつがまわらず、「い、い、いとしい男よ(pi pi priya)」とってしまった女性のことばを、そのままの形で作家は表現している。このように、ある人物の発言をそのまま作品中に模倣として使用することが効果的であることは疑いをいれないところであろう。しかし、それを特殊なものであるとはしても「美点」とすることはどのようにして可能となるだろうか。

5. 模倣の正当化

ボージャは『シュリンガーラプラカーシャ』において、つぎのように模倣表現を正当化している¹²。

正しい(sādhu) 有意味な語および文、能力のないものから生じた不正な(asādhu) 語形、またアパブランシャ、また意味をもたない諸音、さらに未分節(avyakta)の音・語・文である言葉、それらの模倣は正しいことが妥当である。

【問】教養ある人(śiṣṭa)の布施やヴェーダ学習等の模倣、あるいは教養のない人の禁じられていない笑いやしやくりの模倣は正しい。[しかし]禁じられていることの[模倣は正しく]ない。なぜなら、このように甲はブラーフマナ

¹²ŚP 1 (45.14–46, 4): etena yāni sādḥūny arthavanti padāni, yāni ca vākyāni, yac cāśaktijam asādhu śabdārūpam, ye cāpabhraṃśāḥ, ye cānarthakā varṇāḥ, yāś cāvvyaktavarnapadavākyoktayāḥ, tadanukaraṇānām sādḥutvam upapannaṃ bhavati /

nanv anukaraṇaṃ śiṣṭasya vā dānādhyayanādeḥ, aśiṣṭāpratiśiddhasya vā hasitahikkitādeḥ sādḥutvam bhavati; na pratiśiddhasya; yo hy evam asau brāhmaṇaṃ hantīti tasyānukurvan brāhmaṇaṃ hanyāt, so 'pi manye patitaḥ syāt /

naivam; yaś ca brāhmaṇaṃ hanti, yaś cānuhanti, ubhau tau hataḥ; yas tu khalv evam asau brāhmaṇaṃ hantīti tasyānukurvan kadalīstambhaṃ chindyān na sa manye patitaḥ syāt iti /

na cānukaraṇam apaśabdaḥ, anyo hy asāv apaśabdapadārthakah sādhuśabdaḥ; na cāpaśabdapadārthakah śabdo 'paśabdo bhavati, apaśabda ity etasyāpy apaśabdavaprasaṅgāt / yaḥ punar evam asāv apaśabdaṃ prayūkte, iti tasyānukurvan apaśabdaṃ abhidheyeṣu prayūkte, so 'paśabdakāry eva bhavati iti //

を殺す、と考えて、甲[の殺害行為]を模倣して乙がブラーフマナを殺してしまうと、乙もまた脱落者(patita)となってしまうと私は考える。【答】そのようなことはない。ブラーフマナを殺す甲と[甲を]模倣して[ブラーフマナを殺す]乙は、いずれも[ブラーフマナを]殺す。しかし、甲はこのようにブラーフマナを殺す、と考えて甲を模倣して、カダリー樹の幹を切る者は、脱落者とはならないはずであると私は考える。

また、模倣[語]は間違った語(apaśabda)ではない。なぜなら、それは間違った語をその表示対象とする別の正しい語であるから。そして間違った語をその表示対象とする語は間違った語ではない。なぜなら、[もしそのようであるとすれば]「間違った語」というこの語さえも間違った語であることになってしまうから。一方、甲はこのように間違った語を使用する、と考えて、甲を模倣して間違った語を、諸々の表示対象に対して乙が使用すれば、その乙はまさしく間違った語を使うものとなる。

ここでボージャは、模倣表現についてそれを「間違った語ではない」とし、その理由として「間違った語をその表示対象とする別の正しい語」であるからという。すなわち、模倣表現の表示対象は、模倣される言葉そのものであり、したがって、模倣そのものは正しいものたりうるのである。先に見た例にあてはめれば、作品中の模倣表現である「い、い、いとしい男よ」という表現の表示対象は、模倣されるものである女性が発した「い、い、いとしい男よ」という表現そのものである。

6. ボージャの議論の前提

この箇所は、Raghavan (1998, 45, fn. 4)がすでに指摘するように、『アシュターディヤーイー』(Aṣṭādhyāyī)の付属文献である『音素リスト』(Akṣarasamāmnāya/Śivasūtra)の第2ストラ(ŚS 2: i u ṛ ! K)に対するパタンジャリの『マハーバーシュヤ』の議論を受けたものである。当該の『バーシュヤ』における議論は、ストラ中の!音読上げの必要性をめぐるなされる。一連の議論のなかで『バーシュヤ』は次のように述べている¹³。

¹³MBh on Śivasūtra 2: viśama upanyāsaḥ / yaś caivam hanti, yaś cānuhanti, ubhau tau hataḥ / yaś cāpi pibati, yaś

[それは] まちがった言明である。甲がこのように殺し、乙がまねして殺す、甲乙はいずれも殺す。甲が飲み、乙がまねして飲む、二人はいずれも飲む。しかし、甲がブラーフマナを殺す、あるいはスラー酒を飲む、それをまねて、乙が沐浴し、香油を塗り、花輪を首にして、カダリーの幹を切る、あるいは水を飲む、とすれば、乙は脱落者であるとは考えられない。同じように、目下の場合でも、甲が間違った語を使用していると考えて、乙が甲をまねて間違った語を使用するならば、乙もまた間違った語にかかわる者となってしまう。しかし、[乙が使用した]こ[の語]は、間違った語を表示対象とする別の語であり、その表示対象に関して [i音の] 教示がなされねばならない。そして、間違った語を表示対象とする語は間違った語ではない。まちがいなくこれはこのように知られねばならない。なぜなら、間違った語を表示対象とする語は間違った語であると考え人にとっては、「間違った語」というまきこ[の語]も不正語であることになってしまう。しかしそれは間違った語ではない。

ボージャがこの『バーシュヤ』を前提としていることはあきらかであろう。

7. 結語

作品中で欠点が美点となるための基準は、その作品に対する適合性である。しかし、文法的な誤りを含む表現を模倣した表現の場合には、単に適合性のみによって、欠点が美点となるわけではない。模倣表現の表示対象を被模倣表現であるとすることによって、それ自体がまず正しいものとなり、その上でそれは美点となるのである。このボージャの立場は、パタンジャリによる模倣についての議論を前提とし、それをボージャ自身の修辞学へ応用したものである。

cānupibati, ubhau tau pibataḥ / yas tu khalv evam asau brāhmaṇaṃ hanti evam asau surāṃ vā pibatīti tasyānukurvan snātānulipto mālyaguṇakaṇṭhaḥ kadalīstambhaṃ chindyāt payo vā pibet, na sa manye patitah syāt / evam ihāpi ya evam asāv apaśabdaṃ prayuṅkte iti tasyānukurvann apaśabdaṃ prayuṅjīta, so 'py apaśabdabhāk syāt / ayaṃ tv anyo 'paśabdapadārthakah śabdo, yad artha upadeśah kartavyah / na cāpaśabdapadārthakah śabdo 'paśabdo bhavati / avasyaṃ caitad evaṃ vijñeyam / yo hi manyate apaśabdapadārthakah śabdo 'paśabdo bhavati iti apaśabdaḥ ity eva tasyāpaśabdaḥ syāt / na caiṣo 'paśabdaḥ /

また、このことから、ボージャが『シュリンガラープラカーシャ』の前半で、主として文法学にかかわる細かな議論に、他の修辞学書にはみられないほど例を見ないほど多くの紙幅を割いていることの意図をうかがうこともできるであろう。

略号及び参考文献

- A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*.
 BN: Bhaṭṭa Narasiṃha's *Vyākhyā* on SKĀA. See Kamimura (1976ab).
 MBh: F. Kielhorn, ed. Revised by K. V. Abhyankar. *The Vyākaraṇamahābhāṣya of Patañjali*. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Institute, 1962 (3rd ed.).
 Ratneśvara: Ratneśvara's commentary on SKĀA. See SKĀA.
 ŚP: V. Raghavan, ed. *Śṛṅgāraprakāśa of Bhoja*. vol. 1. Harvard Oriental Series 53. Cambridge: Harvard University Press, 1998. (参照の便宜上、章を示したのち丸括弧内に頁と必要ある場合には行を示す。)
 SKĀA: Viśvanaāthabhaṭṭācārya, ed. *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇāṅkāra*. Benaras Hindu University Sanskrit Series 14. Varanasi, 1979.
 SKĀV: V. A. Ramaswami Śāstri, ed. *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇa of Śrī Bhojadeva, with the Commentary Hṛdayahāriṇī of Nārāyaṇa Daṇḍanātha*. 4 vols. Trivandrum Sanskrit Series 154. Trivandrum: University of Travancore, 1948.
 HH: Hṛdayahāriṇī commentary on SKĀV. See SKĀV.
 Kamimura, K.
 1976a Bhaṭṭa Narasiṃha's *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇavyākhyā* (Pariccheda I). *Buddhist Studies* (『佛教研究』) 5: 100–140.
 1976b Bhaṭṭa Narasiṃha's *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇavyākhyā* (Pariccheda I-3). *Journal of Indian and Buddhist Studies* (『印度学仏教学研究』) 49 (25-1): 503–511.
 Pollock, S.
 1998 *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa and the Problem of Rasa: A Historical Introduction and Annotated Translation*. *Asiatische Studien/Études Asiatiques* 52-1: 117–192.
 Raghavan, V. ed. 1998. See ŚP.
 Raghavan, V.
 1942 *Some Concept of the Alaṃkāra Śāstra*. The Adyar Library series 33. Madras: Adyar Library and Research Centre.
 1978 *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa*. 3rd. ed. Madras: Punarvasu.
 本田義史
 2004 「インド古典修辞学における修辞と感情」
 『比較論理学研究』2: 31–38.
 (ほんだ よしちか, 広島大学[インド哲学])